

児玉聡『功利主義入門』へのコメント

江口聡*

現代経済思想研究会・第11回 2012/08/15

功利主義の魅力

長所	内容	児玉本
平明・シンプルさ	帰結主義、幸福主義、総和最大化。とにかくみんなの幸福を増やす。	強調されている。グッド。
(普遍的)善意	非常に利他的な思想	強調されている。
直観との(一見しての)整合	「結果が大事」「みんなの幸せが大事」	強調されている。少なくともJ美の直観には整合的。
問題解決能力	情報があれば基本的にどんな問題にもガイドを提出できる。	暗に含意されている
歴史的・実践的貢献	実際に世界を改善する原動力となってきた。社会福祉、動物、女性解放 etc.	公衆衛生の歴史を辿ることで強調されている。グッド。
世俗的・経験的・実証諸科学と親和的	形而上学に訴えない。経済学や心理学、生物学等と親和的。すくなくとも他分野の知見に反するような要求はしない。	あまり触れられていない。対立する他の理論にあまり触れてないので明確ではない。
基礎づけ	他の理論よりごくシンプルに基礎づけできる	いまいち?

功利主義に対する主な批判

権利・一般的な意味での正義	功利主義は権利や正義を軽視する。	本書を通じて権利や正義という語はほとんど登場しない? 「自然権」は第5章で軽く。
平等・分配の正義	不平等を放置し、促進する。	第5章で論じられる。
応報の正義	善に報い、悪を罰みましょう。責任、非難、刑罰などの問題を含む。	触れられていない? 議論があってもよかったかもしれない。
自由	パターナリズム・権威主義・全体主義だ。	公衆衛生を論じる際に議論。とてもグッド。
忠誠心・家族愛・友情・狭い意味のケア・個人の幸福	公平すぎる。人間関係の価値を理解していない。要求が高すぎる。	ゴドウィン問題。間接功利主義・規則功利主義を紹介して十分グッド。
計算可能性	本当にそんな複雑な計算ができるか	規則功利主義。伝統や慣習の重要性に触れてないのはx。
幸福の個人内・個人間比較	比較できるの?	「幸福メーター」の話として。目盛が個人間で同じかどうかという話はなし。
幸福の定義、計量	幸福とは何か? どう測るか? 測れるか?	快楽説、選好充足説、客観的利益説を紹介。グッドだが.....
総量主義か平均主義か	幸福をどう増やす?	触れない。生命倫理・人口問題・環境問題などを考える場合にはけっこう大きな問題。
道徳的直観・道徳的感情	功利主義が求める「合理的・理性的」思考とは別の価値基準がある。	第7章で脳神経科学から攻め返す。

* 京都女子大学 eguchi@kyoto-wu.ac.jp

上の表にあげたように、『功利主義入門』は平明に書かれた優れた功利主義の魅力の紹介とディフェンスになっている。気になった点を3点だけ指摘したい。(1) 功利の原理の根拠づけ、(2) 幸福、(3) 近年の道徳心理学が功利主義（広くは規範倫理学）に及ぼす影響の三つである。

1 功利の原理の根拠づけ

- 『功利主義入門』は功利主義を紹介することに加えて、よくある誤解や（児玉が論敵としている）直観主義からの批判から防衛することに重点を置いている。しかし功利主義・功利の原理の根拠づけがなにもおこなわれておらず、あたかもそれ自体は無根拠な一つの道徳的信念・信条を開陳しているかのように見えてしまう。

自分も友人も、楽しいと思ったことをやり、苦しいと思ったことをなるべく避けて生きている。……結局、快樂を求め、苦痛を避けているのだ。実際に人々がそうやって行動するのであれば、何をなすべきかを考えるさいにも、快苦を考慮に要れるのが当然だろう。(p.45)

……ではわたしは何を行為の指針として生きるべきか。J美はそう思って『序説』を読み進めた。すると、「功利性の原理」という「正・不正の基準」が出てきた。……私たちは社会の中で生きているのだから、自分のことだけでなく、同じ社会に生きている人のことも考えないといけけない。……道徳も政治も、その目指すところは人々の幸福の増大であり、不幸の削減であるべきだ。……倫理的に生きるとは、自分の力のあとう限りで、人々を幸福にすることだろう。(p.46)

- 典型的な自然主義的誤謬？あるいは単に上から功利主義を与えているだけに見える。
- 「なぜ倫理的であるべきなのか」そして「なぜ功利主義に従うのか」はもちろん倫理学最大の問いのほず。この問いに対する答は児玉にとって自明なのでうまく書けていないのではないだろうか。

「(J美は) 倫理が気になるからこの立場が立派だと思うけれど、倫理に関心のない人だったらどうだろうか。「なぜ自分の幸福ではなく、最大多数の最大幸福を追求しないといけけないのか」と言うのではないだろうか。(p.51) ……なるほど、とJ美は思った。自発的に功利主義に従って行為できる人はそうすればいいし、そうでない人については、法律をきちんと整備することで、社会全体の幸福を促進するか、少なくともそれに反しない仕方で行為してもらえばいいわけだ。(p.52)

- これは、「なぜ私は最大多数の幸福を追求しないといけけないのか」という問いに対する答にはまったくなっていない。なぜJ美は、なぜ「倫理に関心のない人」が功利主義を採用しなければならないのか、という問いに対して、突然為政者・立法者の視点に立って社会の幸福を促進するための方策をとればよいと考えるのか。
- 「功利の原理の証明」のような問題を児玉は真剣に考えているのだろうか。せめてシンガー流の正当化程度（人は（自分の）幸福を求め + 道徳は普遍的である みんなの幸福を増大させるべきである）のことはどこかで説明しておくべきだろう。ゴドウィンを使って、人々を impartial に扱うべきなのだからそれぞれの人の幸福を平等に扱うべきなのだ 功利主義、のような形のものも可能だったかもしれない。

2 幸福

2.1 幸福についての三つの立場

- 幸福の内実の問題を正面から取りあげたのは非常に高く評価できる。こうした議論は倫理学者にとっては見なれたものだが、一般読者には目新しいだろう。ただし幸福についての「快樂説」「選好充足説」「客観的リスト説」の三分法はパーフィットやグリフィン (Parfit, 1984; Griffin, 1988) 以来標準的だが若干古いのではないか。
- 快樂主義。快をもたらすものの中に共通の「質」を見出すことが実は難しい。けっきょくは、欲求するものをもたらすものが快をもたらすものであると定義しなければならなくなる。
- 選好充足説は児玉自身があげているような各種の奇妙な効用 (アルツハイマー患者の若い時の欲求、自分の死後に対する欲求、外的選好 etc.) を想定することになるので採用しにくい。児玉が指摘しているように適応的選好や不合理 (十分な情報を欠いた) 選好の問題もある。
- 客観的な利益やニーズの充足。「利益」という語だけでは理解しにくいので、一貫して「客観的利益」のように表現してほしい。また、活動としての幸福 (エウダイモニア) についても触れてほしい。これらの説がけっきょくは「個人が幸福になるための基盤を提供しているだけ」という児玉の指摘は正しい。
- 国内で人気のセンやヌスパウムの capability アプローチに (一応) 触れる必要はなかったか。

2.2 他の選択肢はないか

- たとえば、高額宝くじが当たっても主観的には幸福にならない、障害者の主観的幸福度は健常者が考えるように低いものではないというデータ (Brickman et al., 1978) や、収入と主観的幸福感の関係などを示した方が、幸福について読者に考えてもらう上ではベターだったはずだ。近年のポジティブ心理学の研究は功利主義者に多くのものをもらしてくれているように見える (Peterson, 2006; Seligman, 2011)。こうした心理学の知見を簡単に紹介しておく。
- 主観的幸福は最近心理学で盛んに研究されている。心理学で測られているのは主観的 well-being。特に全体としての人生に対する満足感 (Diener, 2000; Kahneman et al., 1999; Diener and Seligman, 2002; Diener et al., 2006; Tiberius and Plakias, 2010)。ディーナーたちの尺度は快ではなく満足感を尋ねるもので、次のような質問に同意するか 7 段階で答えてもらう。
 - ほとんどの面で私の人生は理想に近い。
 - 私の人生の状態はすばらしい。
 - 私は自分の人生に満足している。
 - ここまでのところ、私は人生に欲しいと思っている重要なものを手に入れた。
 - もし人生をもう一度生きられるとしても、私はほとんど何も変えたくない。
- こうした設問は「ナラティブ/物語としての人生」や「人生の意味」のような魅力的な発想とも関係していて注目する必要がある (たとえば Bauer et al., 2008)。
- Peterson (2006) から主観的幸福と特性や活動の相関関係。遺伝的要因が主観的幸福度の 50% ~ 70% を説明する。主観的幸福度 = 個人のセットポイント + 環境要因 + 自発的活動。

0～弱い相関	年齢、性別、学歴、社会階級、収入、子供の有無、人種・民族、知性、身体的魅力
中程度の相関	友人の数、結婚の有無、宗教性、余暇活動、身体的健康、良心性、外向性、神経症傾向（負の相関）、内的なコントロール感
強い相関	感謝、楽観性、雇用の有無、セックスの頻度、ポジティブ感情を経験する時間の割合、幸福尺度の検査・再検査信頼性、一卵性双生児の幸福度、自尊感情

- 主観的幸福度（全体としての人生満足感）を向上させるには、伝統的によく知られている要因が重要 (Diener and Seligman, 2002)。
 - 必要に応じた物質的資源を提供できる民主的で安定した国に住む。
 - 応援してくれる友人や家族をもつ。
 - 報いがあり魅力ある仕事もち、そこそこの収入を得る。
 - まずまず健康で心理的問題を抱えたときに治療を受けられる。
 - 自分の価値観に合致した目標を持つ。
 - ガイドや目的や人生の意味を与えてくれる哲学あるいは宗教をもつ。
- 理論的には、古典的な快樂説ではなく、欲求や態度を取り入れた態度的快樂説 (Feldman, 1997, 2004; 安藤, 2007) は有望かもしれない。知悉的充足説 (well-informed preference satisfaction theory) と実質的に同一になるかもしれない。
- 児玉が指摘しているように、利益説はけっきょく人生に対する満足を促進する客観的条件を指摘したものの。人生満足説は態度的快樂説と類似した特徴をもつ。おそらく知悉的欲求説や態度的快樂説とも整合的だろう。これらの幸福に関する有望な理論は、実践的には同じような状態を幸福とみなすことになるのではなると言えるかもしれない。
- もし近年の主観的幸福についての実証的研究が正しいラインにあるならば、功利主義者はそうした知見をとりいれた社会政策をとらねばならないことになるだろう。

3 道徳心理学

- 人間の感情に注目するべきだという児玉の意見に賛成。
- ただし、「このような新しい人間理解に対して功利主義はどう応答したらいいのだろうか」という問いを立て、「援助義務に対する動機を生み出す方法について……考えてみよう」(p.185) と進むのは私には異常に思える。なぜ功利主義を見直すのではなく、「新しい人間理解」を用いて人々に功利主義に合致した行動をとらせようとするのだろうか。これは先にJ美が「なぜ功利主義か」という問いに対して功利主義的に人々を行動させる方法を考えてしまったのと同じ思考である。道徳的感情は功利主義者が人々をコントロールする対象ではなく、なにが人々の幸福と道徳生活を形づくっているのかを理解するために研究すべき対象のはずである。
- 倫理学者は道徳心理学をもっと真剣に研究する必要があるだろう。もちろん道徳心理学が規範倫理学に規範的基盤を提供することはないだろうが、規範倫理学的立場を主張し擁護する上で考慮しなければならぬ要素は増える。
- ハイト (Haidt, 2001, 2006) のような多元的直観主義者は特に注意する必要がある。ハイトの主張によれば、我々の道徳判断はまず情動的な判断がありそれにあとづけで合理的理由をつけているにすぎない。

功利主義を信奉する研究者自身も、具体的な問題を考える際にはどの程度まで自分の道徳的判断が「理性的な」判断であるのかは疑ってみる必要があるかもしれない。

- Haidt (2012) は我々の道徳性にはおそらく五つ程度の独立した進化的基盤があるだろうと推測している。

	ケア / 危害	公正 / ズル	仲間意識 / 裏切り	権威 / 反抗	神聖さ / 汚れ
進化上の課題	子供を守りケアする	互惠の関係で利益を得る	団結	ヒエラルキー内で相互に有益な関係を結ぶ	汚染を避ける
原始的トリガー	苦しみ、嘆き、自分の子供の泣き声	ズル、協力、欺瞞	グループに対する脅威・挑戦	優越と服従のサイン	排泄物、病人
現代におけるトリガー	アザラシの赤ちゃん、かわいいマンガキャラクター	結婚における貞節さ、壊れた自販機	スポーツチーム、民族	ボス、尊敬されている専門家	タブーとされる思想(共産主義、人種差別思想)
特徴的な情動	慈悲	怒り、感謝、罪悪感	グループとしてのプライド、裏切り者への憤激	尊敬、恐れ	嫌悪感
関連する美德	ケア、親切さ	公正さ、正義、信頼性	忠誠心、愛国心、自己犠牲	恭順、従順	節制、純潔、敬虔、清潔さ

- こうして見ると、我々が功利主義に見いだす魅力は、「ケア / 危害」に対する直観を「公正」の直観によって人類（あるいは有感動物）全体に拡張しているためであると解釈できるかもしれない。しかしそれ以外の道徳的基盤にももっと注意する必要があるだろう。児玉のように単に単に「理性」と「感情」の対立と考えるのは単純すぎるかもしれない。一口に言われる道徳的感情はもっと複雑なものであると思われる。

4 まとめ

- 功利主義の問題を網羅した非常に優秀な入門書。平明で多くの人に推薦できる。
- 陳腐なタイプの反論は『功利主義入門』がやっつけてくれたであろうから、倫理学者は先に進みましょう。
- みんなで心理学を勉強しましょう。

参考文献

- Bauer, Jack J., Dan P. McAdams, and Jennifer L. Pals (2008) "Narrative Identity and Eudaimonic Well-being," *Journal of Happiness Studies*, Vol. 9.
- Brickman, P, D Coates, and R Janoff-Bulman (1978) "Lottery winners and accident victims: is happiness relative?," *Journal*

- of personality and social psychology*, Vol. 36, No. 8, pp. 917–27, August.
- Diener, Ed (2000) “Subjective well-being: The science of happiness and a proposal for a national index,” *American psychologist*, Vol. 55, No. 1, p. 34.
- Diener, Ed, Ricahrd E. Lucas, and Christie Napa Scollon (2006) “Beyond the Hedonic Treadmill: Revising the Adaptation Theory of Well-Being,” *American Psychologist*, Vol. 61, No. 4.
- Diener, Ed and Martin E P Seligman (2002) “Very Happy People,” *Psychological Science*, Vol. 13, No. 1, pp. 81–84.
- Feldman, Fred (1997) *Utilitarianism, Hedonism, and Desert*: Cambridge University Press.
- (2004) *Pleasure and the Good Life: Concerning the Nature, Varieties, and Plausibility of Hedonism*: Oxford University Press.
- Griffin, James (1988) *Well-Being: Its Meaning, Measurement, and Moral Importance*: Oxford University Press.
- Haidt, Jonathan (2001) “The emotional dog and its rational tail: a social intuitionist approach to moral judgment.,” *Psychological Review*, Vol. 108, No. 4, p. 814.
- (2006) *The Happiness Hypothesis*: Basic Books. (ジョナサン・ハイト, 『しあわせ仮説』, 藤澤隆史・藤澤玲子訳, 新曜社, 2011).
- (2012) *The righteous mind: why good people are divided by politics and religion*: Pantheon Books.
- Kahneman, Daniel, Ed Diener, and Norbert Schwarz eds. (1999) *Well-Being: The Foundations of Hedonic Psychology*: Russell Sage Foundation.
- Parfit, Derek (1984) “What Makes Someone’s Life Go Best,” in *Reasons and Persons*: Oxford University Press. (デレク・パーフィット, 『ある者の生を最もうまく行かせるもの』, 『理由と人格：非人格性の倫理へ』, 森村進訳, 勁草書房, 1998).
- Peterson, Christopher (2006) *A Primer in Positive Psychology*: Oxford University Press. (クリストファー・ピーターソン, 『実践入門ポジティブ・サイコロジー：「よい生き方」を科学的に考える方法』, 宇野カオリ訳, 春秋社, 2012 . ただし邦訳は抄訳でありアカデミックな用途には使えない .) .
- Seligman, Martin E. P. (2011) *Flourish : a visionary new understanding of happiness and well-being*: Free Press.
- Tiberius, Valerie and Alexandra Plakias (2010) “Well-Being,” in Doris, John M. and the Moral Psychology Research Group eds. *Moral Psychology Handbook*: Oxford University Press.
- 安藤馨 (2007) 『統治と功利：功利主義リベラリズムの擁護』, 勁草書房 .
- 児玉聡 (2006) 「功利主義と臓器移植」, 伊勢田哲治・榎則章 (編) 『生命倫理学と功利主義』, ナカニシヤ出版 .
- (2010) 『功利と直観：英米倫理思想史入門』, 勁草書房 .
- (2012) 『功利主義入門』, ちくま新書 .